

うっかりしている時

その人の味はうっかりしている時に出る。

うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。

教育の一番ほんとうのところは、しばしば、その人のもち味によって行なわれる。まして、相手が、いわば、最もいい意味で始終うっかりしている幼児たちである場合、我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上であらう。

うっかりという言葉、うっかりする動作、出あいがしらに、うっかりと見せる顔。その時出る我々のもち味こそ……

と、いって、いくらいもち味の人でも、うっかりばかりしてはなるまい、と、いってまた、わがもち味をつつもうとして、うっかりしている時の全くないのも、つくろいに過ぎよう。そこでこそ、幼児教育はむつかしいものと、昔も今もいわれるのである。

——倉橋惣三選集第三卷『育ての心』(フレーベル館)より——

うっかり笑って

西野 紀代子

保育室で五歳の男の子が古新聞をまるめて刀を作ろうとしている。見るともなく通りすがりに目をとめると、意欲的なその子の気持とは正反対に、まるでなまこのように、グニャグニャの刀ができているのを目にする。「ウフフ、」大人は思わず手を口に当てて笑ってしまう。(笑ってはいけない、と思う心が、手を口に当てさせている。)けれどもその瞬間子どもが眼を挙げる。

「アッ、先生笑った。僕のが下手だと思っているんでしょ？」

「ううん、そうじゃないの。下手だと思ったんじゃないけど、刀ってピンとしているじゃない。○○ちゃんの刀、あんまり違うから……」

弁解してみるけれど、一面ヒヤリとしている。理屈で子どもを納得させまい、と思いつながら、自分のしていることは、やはりそれ以外ではないように思えてくる。

「先生、おたまじゃくしが、バラの花びら食べてるよ」

ある日、見学していた四歳児の保育室で、突然見知らぬ子ども